

研究レポート

1

育児に対する父親の意識、 配偶者の評価に対する意識



白梅学園大学 福丸 由佳

今回の調査で、「今以上に家事・育児にかわりたい」父親が2005年の調査の時期から増加傾向にあることが示されたが、現在の自分の家事や育児を父親はどのようにみているのだろうか。また、配偶者はどのように思っていると父親自身は認識しているのだろうか。ここでは特に、育児に焦点をあてて考えてみたい。

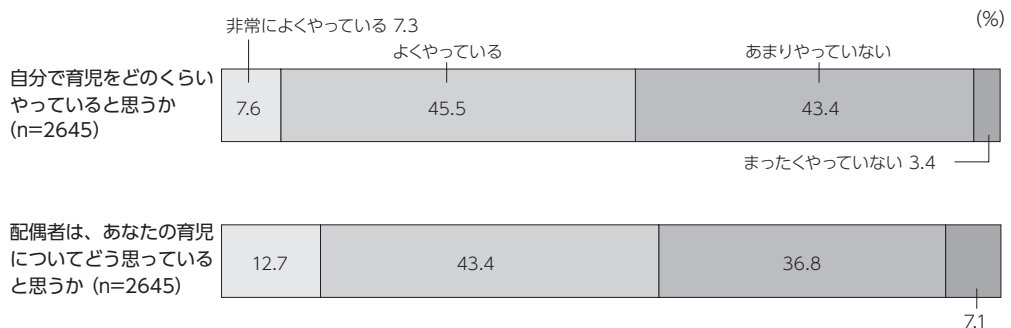
●父親の意識と配偶者の評価に対する意識の ずれ

図1は、父親の育児に対して「自分でどのくらいやっていると思うか」と「配偶者はあなたの育児についてどう思っていると(父親が)思うか」を尋ねた結果である。全体に、父親自身の評価と配偶者がどう思っていると思うか、の比率に大きな差はなく、配偶者がある程度、肯

定的に思っているだろうという父親が半数以上いることがわかる。

では、個人内のずれについてはどうだろうか。「自分で育児をどのくらいやっていると思うか」に対して、自分は「非常に+よく、やっている」に対して、自分は「非常に+よく、やっている」と思っているだろうという群(以下、HH群)、自分は「非常に+よく、やっている」と思うが、配偶者は「あまり+まったく、やっていない」と思っているだろうという群(以下、HL群)、自分は「あまり+まったく、やっていない」が、配偶者は「非常に+よく、やっている」と思っているだろうという群(以下、LH群)、自分も配偶者も「あまり+まったく、やっていない」と思っているだろうという群(以下、LL群)、の4群に分類した。各群の割合は、HH群は

図1 父親自身の育児に対する評価と配偶者からの評価意識



※首都圏の父親のみ (2014)。

43.3% (n=1,146)、HL群9.8% (n=260)、LH群 12.8% (n=339)、LL群34.0% (n=900) で、肯定的に一致しているだろうという群がもっとも多く、否定的に一致しているだろうという群も3割以上いること、一方、夫婦の間でずれがあると感じている父親も、割合は少ないが一定数いることが示されている。

●妻との関係における比較

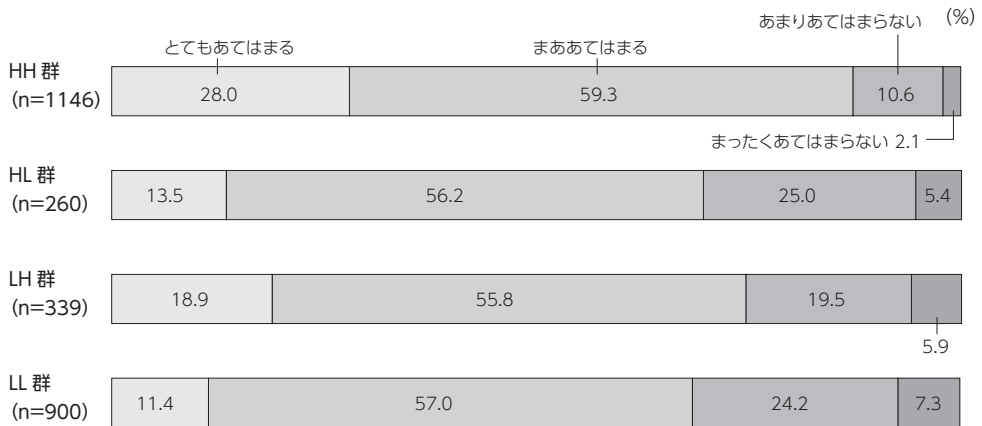
この4群で、「妻から必要とされている」、「(自分と妻は)互いに心の支えになっている」といった妻との関係について検討したところ (図2および、図3)、自分もある程度やっているし、配偶者もそう思っているだろうというHH群は、「妻から必要とされている」、「(自分と妻は)

互いに心の支えになっている」といった意識も高い傾向にあることが示された。それに対して、父親自身はある程度やっていると認めていても、配偶者はそうは思っていないだろうと感じているHL群の父親は、必要とされている、互いに心の支えになっているといった肯定的な意識を持つ割合がHH群に比べて低く、むしろLL群と似た傾向にあることが示された。

●子どもとの接し方への自信

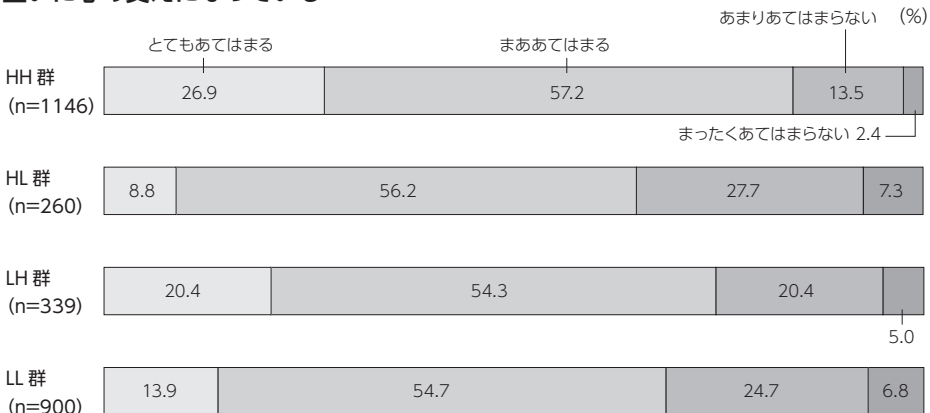
今回の調査結果では、「子どもとの接し方に自信が持てない」割合が、2005年以降増加傾向にあることも指摘されている。そこで、これについてもこの4群での検討を行った。その結果、HH群では、接し方に自信が持てない父親

図2 自分は妻に必要とされている



※首都圏の父親のみ (2014)。

図3 互いに心の支えになっている



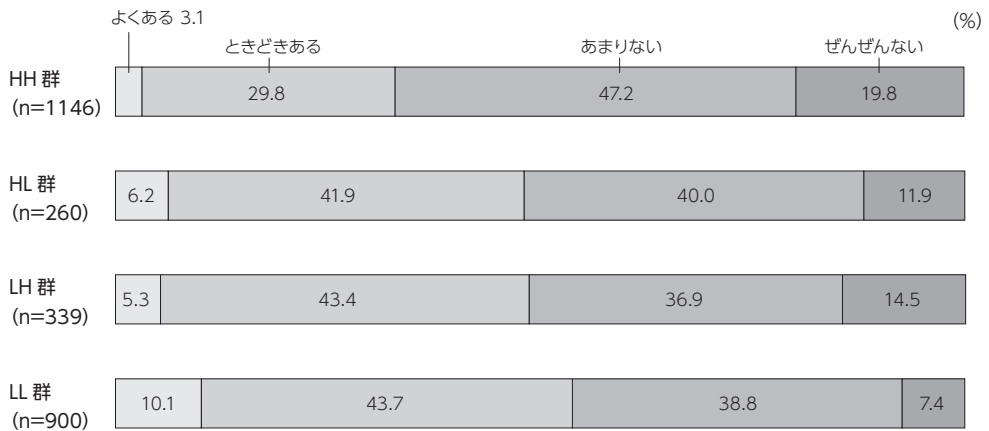
※首都圏の父親のみ (2014)。

は30%強であるのに対して、HL群の父親は約50%が、自信が持てないと回答しているという結果が示された(図4)。HH群とHL群の間は、実際の子どもとのかかわりに大きな差異が見られないにもかかわらず、自分の育児に対して配偶者がよくやっていると思っている父親は、子どもへの接し方の自信もある程度高く、逆にそうは思っていないと感じている場合、子どもとの接し方における自信も低い傾向にあることが示唆されている。つまり、自分の子どもとのかかわりに対して、配偶者がどのように思っているかという父親の認知は、妻との関係や子どもへの接し方の自信に何らかの関係を持っていることが予想される。

今回の結果は、父親自身が感じているずれで

あり、配偶者側の意識は問うていない。そうした限界を踏まえつつではあるが、配偶者が、父親としての自分の子育てをどう見ているかという意識も、父親自身に少なからず影響を持ちうるようだ。特に、「自分としてはよくやっているつもりだが、配偶者はそうは思っていないだろう」といった父親の認知は、お互いの認識の違いにとどまらず、コミュニケーションや関係性の問題にもつながりうる。子どもに手がかかる時期だからこそ、自分の気持ちを伝えたり、相手の思いに耳を傾けたり、お互いの工夫や頑張りに気付いたり労ったりといった、一見ささやかなやりとりにも意味があるのではないだろうか。

図4 子どもとの接し方に自信が持てない



※首都圏の父親のみ（2014）。